研究雑話（74）

人間発達の物質的基礎（三八）：論議（九）、問題の所在、視空間メモにおける基底線の描出。

藤井力夫

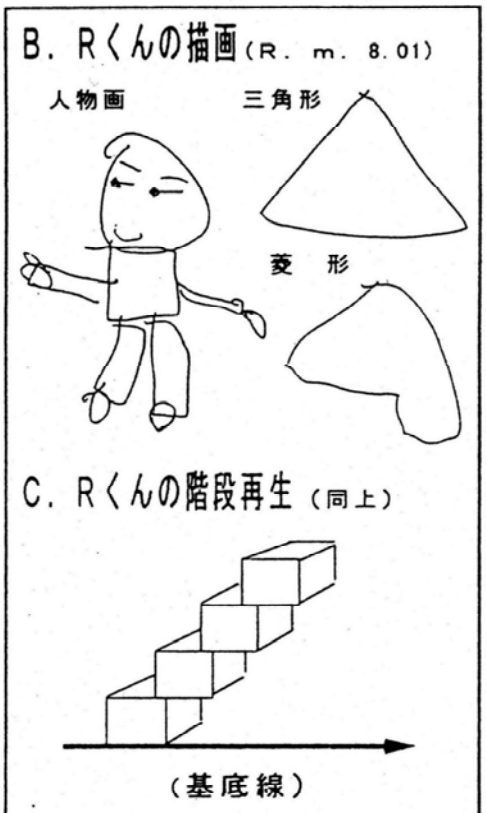
前回は、拍節リズムの採譜から、Rくんにおける音の高さや長さ調節の問題、とくに「裏拍」部での問題についてお話しました。高すぎたり、長すぎたりしてバランスを崩すところに、線的な叙述へと発展できない理由が存在すると考えられます。これはまた、音価の内的尺度に関与しているであろう歩行の「足拍リズム」、とくにサイクル内での母趾球部接床期に相当する問題であることを指摘しました。本雑話・六四の「手で聞き、足で歌う」や六五での「母趾球部支持でつくる〝間〟」と合わせ読んでいただければ幸いです。今回は、まず、音節量の観点からこれらを補足するとともに、拍節リズムの形成が他方の視空間メモに効果するであろうと思われる「基底線」描出の役割についてお話したいと思います。

図A：マイクロフォンの音圧を音節量として表示。図柄部が「裏拍」。／レン／の「ン」や／サム／の「ム」など、裏拍部での音節量の過重な配分の傾向が読みとれます。この拍節内バランスの崩壊が、区切れ部で立ち上がり部と同様の音節量を要求し（拍節リズムの対称性）、助詞等を付ける余裕を無くすと判断されます。

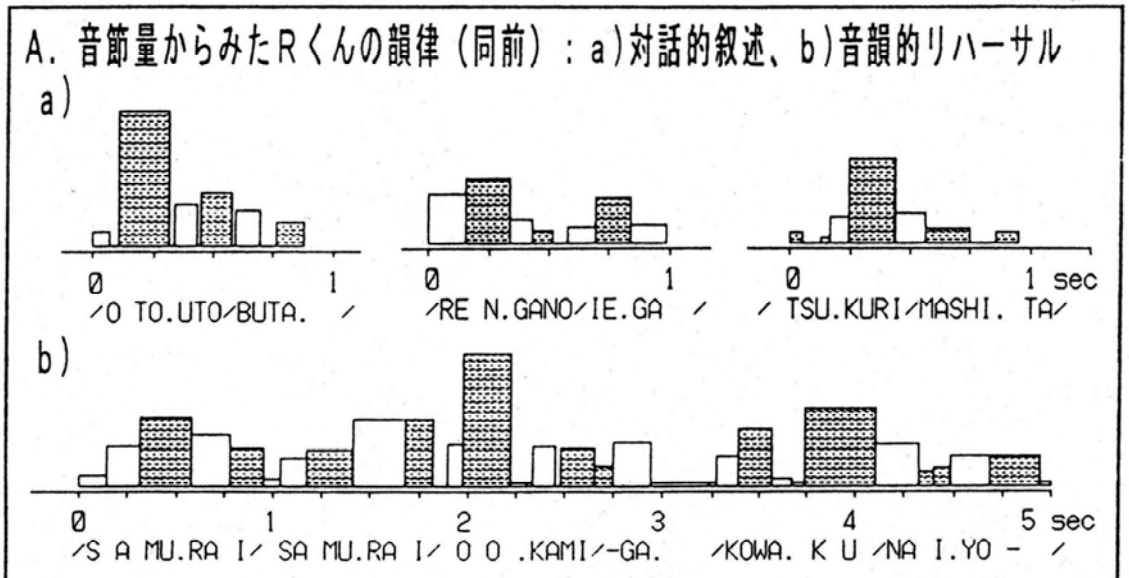
図B：人物画。四角を基本に図式的に描画。学芸会でみんなと踊っている絵も、この図式を基本。舞台や地面の基底線、及び首の描出はない。三角形模写。上からの一筆描き。「底辺」という概念のためには左右に描き分けることが必要です。それゆえ、菱形模写は混乱。基底線の描出は垂線を産出。人物画での基底線と首の描出はこの関係に対応しています。

図C：十個の積み木で順次高くなる階段再生課題。通常、六歳近くになってできる課題です。これができると菱形の描画も可能とされます。Rくんは、図のように両手を使って上部だけをまねようとしました。下から積むということが難しいのです。順次という系列をイメージするためには、視空間メモに底辺という「基底線」を引かなければなりません。事実、地面や海面などの基底線の描出は、拍節リズムに乗せてイメージを膨らませることができるようになってのことです（五歳から六歳）。視空間メモでの基底線の描出は、構成単位への変換を可能にします。これは、「何をどうする」、助詞の利用と無関係ではありません。音韻ループでの「裏拍」と視空間メモでの「基底線」、両者は作業記憶の遂行において表裏の関係を担っているのです。

（北海道教育大学教授）



注：10個の積み木を使って、順次高くなっていく階段を再生する課題。両手で支え上端の部分だけまねる。



注：拍節ごとの音節量をマイクロフォンの音圧量として表示した。音節量のうち無地が表拍、図地が裏拍に相当する。各フレーズとも立ち上げ時、裏拍の調節で無理がかかり、音節量も過剰に消費され、区切り時には拍節リズムの対称性を実現するのに懸命で、助詞などの付属語を付け難くしている傾向を読みとれる（Rくん. m.8.01）。